

春燈

2017 December

12

月号



主宰の句

安立公彦

朝空を占むる葉叢や秋涼し

(水戸二句)

去りやらぬ秋蝶ひとつ好文亭

こゑあらばメゾ・ソプラノや秋桜

雁鳴くや棚田にけふの日をのこし

師を偲ぶいざよふ月の夜はことに



安住敦の句

露けしや家に在る日はものを書き

『午前午後』昭和四十六年

九月は茶室に師の半折を懸ける。「花鳥とともに作者が居、花鳥と共に人生がなければつまらない」と師の口癖。大野林火の死期を見舞った帰路へ秋夕焼かく濃かる間も死はあらむ」と。美しい夕焼に人は死んでゆくと詠嘆の句。俳人協会長と副会長の仲、林火没後の昭和五十七年九月、会長に就任。歳月流れ師の傘下も少ない、今。

小林のり人

安住敦の句

梅雨の犬で氏も素性もなかりけり

『古曆』昭和二十八年

安住先生は昭和四十二年『春夏秋冬帖』で日本エッセイスト賞を受け、生涯に七冊の随筆集を刊行している。その中の一冊『椽の木の蔭で』の中に、飼うでもなく飼わぬでもなく居ついてしまった、野良犬の顛末を書いた一文がある。(昭和三十年六月)俳句の方が先に出来たよ
うだが、一句の中にある深さ厚みを感じる。

字余りの、「で」に味わいがある。

小倉陶女

燈下集



○ 沼田桂子

そここの秋にならうとしてをりぬ
その角を曲がると見ゆる白粉花
木犀の香りをまとひ友来る
落ちてゐる青みかんまだかざり置く
秋の蝶行きつ戻りつ止まりけり

○ 宮田豊子

早朝の洪鐘ひびく古都の秋
密教仏胴の細きや雁渡る
雨冷えや肩をすぼめし土偶群
禅問答交はして群るる曼珠沙華
紅葉挿すカフェの隅の小句会

○ 横田初美

近道は女坂なり赤蜻蛉
運動会子を追ひ掛くるスマートフォン

鳥瓜ゆれつつ記憶たどりをり
樹の間より鳥の睦言良夜かな

新蕎麦やきれいに割れし竹の箸

○ (故) 佐々木並

ひとり身の焼いた秋刀魚を選びけり
美術の秋上野は遠くなりけり
秋日和少年棋士の棋譜きらり
赤とんぼ飛行機雲をゆらしけり
秋惜しむ奥社へ続く木の根みち

七変化次の計画秘中の秘

昼寝覚何時の日か覚めぬ時が来る

秋晴れて山重畳の極彩色

灯火親し身寄りと言へど皆異郷

美醜とは神の手の内吾亦紅

○ 呂 秀 文

ドイツより帰国せし子に茸飯

爽やかや人形作りに精を出し

銀漢や亡き子も入れてワイン飲む

爽やかや若き牧師の怒り肩

降誕祭人形劇に老い一役

○ 井 上 正 子

○ 呉 文 宗

留守電の言ひ分け長々法師蟬

干し竿に爪立つ妻や天高し

天の川ノアの方舟行きゆきて

コンバンハと背筋を正す夜を寒み

湯に浸かる五体の歲月身に沁みて

○ 陳 妹 蓉

月の出をテラスにて待つ集ひかな

己が歩に付き纏ふかに今日の月

コスモスの畑の出口見つからず

稲穂垂れ寒村まさに暮れんとす

爽やかに再会の日の近づけり

○ 三 代 川 玲 子

フランベの炎一瞬秋の雨

ぬばたまの闇につまづく虫の声

ふくらんで芒の海に没る日かな

まづ一献おつつけ月の昇るらむ

仲麻呂の白楽天の月仰ぐ

○ 豊 行 青 峰

無花果や裏窓たたく夜の雨

秋冷や一夜泊りの旅靴

青北風や島に残りし相聞歌

秋日濃し池塘に鳥の羽根やすめ

「天上大風」良寛遺墨秋澄めり

水分くる信玄堤下り鮎

秋茜信濃に多き塞の神

霧晴るる連山素顔見せにけり

草紅葉信濃ゆ甲斐へ塩の道

山腹を繋ぐ鉄塔秋の暮

○ 高 埜 良 子

夜つびてを止めることなくつづれさせ

器量もつ蟋蟀土間に共鳴し

縫ふ紵ける為付ける続くつづれさせ

立ちかはり入れかはり鳴くちちろ虫

蟋蟀や三和土にいつか住み慣れて

○ 瀬 戸 峰 子

悲話語り継がるる城址昼の虫

追分の瞽女の道とや鳥渡る

無言館無言に出づや小鳥鳴く

鳴き切つて蝸天を仰ぎけり

無住寺のほとけの咲かす彼岸花

○ 吉 川 隆

つるみたる蜻蛉止まりし舫ひ杭

鬼ごっこ釣瓶落しに残されて

携帯にすぎる片恋十三夜

水切りの石の行方や秋夕焼

日溜りを包む風呂敷冬隣

○ 今 井 弘 雄

東京の秋の名苑訪ねけり

冷やかや挨拶しても知らぬ顔

秋冷や雨降りつづく二十日間

秋簾みられてならぬものみられ

かくしだてするにあらねど秋簾

○ 本 田 保

鷹渡る女城主の戦渦の地

あのとぎのときめきのなほ芒原

冷まじや捨てられぬ物ばかりなり

その一言の多きが仇に虫の夜

天高しまだこれからの二十年

○ 清 水 美 子

春星賞受賞作（20句）

銀杏の実 近藤真啓

金色に光る画鋏や初暦

受験子のしきりに正す眼鏡かな

囀やシカゴ育ちの帰国子女

歓迎のゴム風船や彩とりどり

一言で終ふる挨拶若桜

夏雲や円陣の声沸き上がる

蛇口より直に飲む水蟬時雨

投げきつてガッツポーズの日焼かな

ビール注ぐ優勝杯になみなみと

教科書は線で真赤や法師蟬

涼新た標本箱の木のほひ

有意差のつかぬグラフやちろ虫

頑に持論は曲げず鬼やんま

月渡る研究棟に影ひとつ

焼そばのもやしたつぷり文化祭

キャンパスに談笑の輪や銀杏の実

今朝の冬百のマネキン口開き

短日やドリルで削る人工歯

マフラーを解くや遅刻の女学生

無礼講けふは焼芋日和かな

春星賞受賞作（20句）

夏日影 平沢恵子

おほでまりの奥にちりめん民芸店

万緑や茅葺の駅ひとつ置き

さざなみに雲ほぐれゆく植田かな

消ゆるともなく遠雷のきえゆけり

ロープウエーのゆるぎ時間や夏日影

伝説の石に震へり黒揚羽

芭蕉玉解く源泉の湯のけむり

風鈴や湯宿の静寂深まりぬ

釣忍湯場ゆく人も暮れにけり

湯の底の小石のまろみ星涼し

川音を招き入るるや夏料理

湯あがりのにほひのままの端居かな

麦秋の山路踏みしめ登りけり

天辺に放てるこころ雲の峰

ケルンひとつや一瞬の青春期

木道をゆくやあとさき時鳥

緑蔭にかかるき会釈のふたりかな

山路来て滝一本の止めなす

吊橋の人影あはき芒種かな

花は葉に人ごゑ満つる宿場町

当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

括る間も白萩白をこぼしけり

新涼や住職に問ふ墓終ひ

大字の小字の秋の田となれり

そこからは隣の田ぞよ稲雀

秋の灯や越後の見舞客

○ 永井恵子

休日の狐日和や新豆腐

夫と行く神話の里や曼珠沙華

捨山の杉に値のつく百舌日和

学僧の如来講義や秋の雨

湯豆腐や無口な夫と摂る夕餉

○ 大西由美子

独り居の隣家の灯る白露かな

夕づきて艶めく風や酔芙蓉

推敲の筆の自在やつづれさせ（荷風創作ノート発見）

ラ・フランス食べ頃までを画材とす

筆持てば言葉溢るる夜長かな

○ 海村禮子

秋の蝶己が歩みに合はせけり

群れなして走る緬羊霧の中

爽やかに今日のひと日の始まり

白雲を幾度越えし月祀る

色鳥や哲学の道歩みゆく

○ 中里よし子

寄辺なく来て秋蝶のさまよへり

何処に咲いても淋しき花や曼珠沙華

秋高し帆船白き帆を張れり

芋の露笑ひ転げて落ちにけり

吾亦紅手折るや遠き日が其処に

春燈の句

安立 公彦選



おだやかな日差し雀がこぼす秋

広島 浅田セツ子

鳴けぬ身を跳ねて髭振る寵馬

無花果の熟すを待てる山の道

忙しき世を暫し鎮めて今日の月

秋の薔薇一輪咲いて夫迎ふ
てきばきと白露の答へひとつかな

水面刺す刺繡にも似る秋の雨

福島 室井津与志

夕暮の風に触れ合ふ秋桜

遠吠えのして仲秋の丘閑か
師の御恩尊くありて菊の花

草叢に譜面を隠し虫の声

隣との御縁深しやこぼれ萩
人通り増ゆる夜店や声高し

リバティの窓外に燃ゆ曼珠沙華 (待急会津浅草行)

島根 土江 比露

初紅葉空の碧さに触れてみる

清水汲むスイッチバックの一両車
蘆に風小蟹の走る舟だまり

手まねきにゆるびゆく歩の花野かな

千葉 平沢 恵子

欄干なき橋の真中を秋の蝶

蹲踞の水呑んでゐる秋の蜂

帰宅時を書き足す手帳獺祭忌

碧潭へ傾るる漆紅葉かな (秋甲小安峽)

東京 佐俣まさを

父の忌や月見団子に餡添へて

鳥海山を遠見の露天七竈

月光の明るき窓に身をよする

東京 山口 地翠

ひとり居の風呂場の窓や虫すだく

巖間より猛る噴湯檣紅葉
友来る膳に添へゐる菊の酒

余言

安立公彦

施餓鬼会や散華や声明堂に充つ

片桐てい女

「施餓鬼」は、盆の頃寺院で行う無縁仏の供養を指す行事。「散華」は仏に供養の花を散布すること。仏前に香華や灯明などを供え、無縁のさまよう霊をなぐさめる盆の頃の仏事である。「声明堂に充つ」が、その法事の荘厳さを余すところなく表現している。

今は社会一般が現世的となり、このような法事の伝統も薄れつつあるが、作者の近郷はその行事を守っているのだろう。むしろ今の世にこそ必要な法事ではなからうか。

胸中に修する忌あり断腸花

西川 保子

「断腸花」は「秋海棠」の異名。歳時記によつては断腸花を併記していないものもある。或る歳時記では、秋海棠の名を、実物にふさわしくない、としているものもある。

手許に「季寄せ草木花」という植物歳時記（全七巻）がある。うす紅色の花が垂れ咲いている景は可憐な風情であ

る。背景は岩と暗い流れ。この写真を見てみると、「胸中に修する忌あり」が何の異義もなく納得される。胸奥に在る「修する忌」は作者独りの世界であらう。

人柄の起居に菊の香りけり

佐藤 信子

俳句にとつて、省略法という修辞は、大切な表現の一つである。この句、「人柄の起居に」は、「立居振舞に」、その人の上品な仕種がほのかに現れている」という内容。この句の場合、「人柄」と「起居」が実によく呼応している。その取り合せがあつて、初めて可能な修辞である。

「菊の香りけり」もその修辞にふさわしい。俳句をどう表現するかは、全ての俳人にとつて終生の念願である。それは秀句の鑑賞を含む、日頃の精進あるのみであらう。

退院の妻に添ひ寝の良夜かな

柴崎甲武信

本部句会でこの句を見た時、ほのぼのとした安らかな思いを感じた。この「妻」は、春燈の幹部同人である柴崎富子さん。体調を崩して長い間入院中であつた。その「妻」が退院という慶事を迎えた。作者の悦びは如何ばかりか。それはまた私たち句友の悦びでもある。

この句「妻に添ひ寝の」が、如何にも優しい表現だ。「退

院の」がその優しさに言葉を添える。折しも今宵は、中秋名月。良夜にふさわしい壮健さを祈るばかりだ。

迢空言生絹のごとき秋の風

木多芙美子

「迢空言」は、歌人釈迢空、国文学者折口信夫の命日。昭和二十八年九月三日。六十六歳だった。今から考えると若すぎる。歌人としては、歌集『海やまのあひだ』の冒頭の歌、〈葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり〉がよく知られている。亡くなる二か月前から箱根の山荘に滞在、病状が悪化して、へいまははた老いかがりまりて誰よりもかれよりも低きしはぶきをするのよいうな歌を作り、帰京のあと入院死去する。

作者は迢空の短歌の愛読者か。小説『死者の書』も高い評価を得ている。この句、「生絹」が如何にも相応しい。

朝霧を歩荷の鈴の近づき来

武田 巨子

「歩荷（ほつか）」は、重い荷を背負い山に上げること、またそれを職業とする人。明けやらぬ山路を登っていると「歩荷」の腰に下げた鈴の音が近づいて来る。言葉にする^とと僅かだが、その実景は雄大でありまた峻険である。

私は登山はしないが、『日本百名山』の著などは、折に触れ読んでいる。今作者の登っている山は、大台ヶ原山だ

ろうか。「歩荷の鈴の近づき来」はいい表現だ。「朝霧」がそれに背景を添える。爽やかな山岳詠である。

名を呼ぶも手向け切なし今日の月

諸岡 孝子

前書はないが、この句は先般しくなった尾形はま子さんへの追悼句だろう。十月号の、ささりげなく人遠ざけて吊忍の句が遺句となった。春燈への出句は何時頃か知らないが、九年前すでに四句欄に作品が出ている。これからという時に、その急逝が惜しまれる。

この句、「名を呼ぶも」に籠められた作者の思いが良く伝わって来る。故人への手向けの花の、「切なし」も同じだ。折しも仲秋の月がその手向けを優しく包む。

一筋といふ清しさや虫時雨

西岡 啓子

この「一筋」は、その道一筋に、という「専心」の意。志を立てた以上、何事も中途半端な態度は避けて、その思いを貫くことが大切だ。道は自ずと開けて来る。その志が俳句の道であれば尚更のこと。

作者は俳句を始めて二十年近くなるろうか。真摯に俳句の道を精進して来たお一人だ。「一筋といふ清しさや」は、対象があつての表現だが、全てに通じる。納得のゆく表現である。「清しさ」に対象への思いが感受される。